

演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、デベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●常任理事

おおいし
大石 裕
ゆたか

美とメッセージ

先日、銀座の教文館ビルを訪れました。そこで開催されていた「藤城清治 光と影の楽園展」の作品をぜひ見たいと思ったからです。93歳になられた藤城さんの影絵は、長く「三田評論」の表紙を飾っていました。我が家の居間の壁には、藤城さんの作品の素敵なカレンダーがあります。それを見ると、心が和みます。

さて、慶應義塾社中に加わって最も良かったこと、それは多種多様な分野で、しかも優れた仕事をされている方々と触れ合えたことだと思っています。研究・教育、医療、政財界はもろんのこと、様々な分野で多くの塾員（時には塾生）がまさに第一線で活躍しています。私のゼミの卒業生を見ても、ウィーンからヨーロッパの政情を伝える特派員、作家、山小屋の経営者、弁護士、コミック編集者、力作を世に問うている研究者など実に多彩です。静岡の宿でテレビをつけると、ついこの間卒業したゼミ代表が、アナウンサーとして地域のニュースを一生懸命伝えていました。

このように慶應義塾は多様な人材を輩出してきました。言う

までもなく、藤城さんはその代表的かつ象徴的な存在です。慶應の普通部、大学予科に進み、1947年に経済学部を卒業後、会社に勤めながら作品を発表されていた時期もあります。題材は、宮沢賢治の小説、日本の四季や祭りなど様々です。展示されていた作品の中で、特に印象深かったのは、《戦後70年を迎えた原爆ドーム》、《福島原発ススキの里》、《九十九里浜旧香取海軍航空基地掩体壕のおもいで》という、「戦争と平和」と題された3つの作品でした。影絵という美の中に、日本や世界に対する強いメッセージが込められていると感じたからです。

慶應義塾は多様な背景をもつ人たちが、様々な考えや言葉をかかわす学塾として、昔から機能し続けてきました。だからこそ、慶應義塾は文化の創造・発信拠点として高い評価を得てきたと言えます。藤城さんもそうした環境の中で感性を育んできたのでしょう。影絵という美しい作品を通じて藤城さんが発するメッセージ、それを胸に刻んでこの一年を過ごしていこうと思っ